

『冬の日』という標題について

安保 博史

《一》

芭蕉七部集の第一『冬の日』の標題の由来については、「霜月や」歌仙の巻の芭蕉の脇「冬の朝日のははれなりけり」におけるといふ説が次のように雪中庵二世吏登述・蓼太編の『はせを翁七部搜』（宝暦十一年成）に見え、広く流布している。

霜月や鴻のつくづく並び居て

冬の朝日のははれなりけり

此脇は余情紙毫に尽しがたく、冬の日といふ題号も是から附た物ぢやげな。

蓼太系諸注釈書は右の『冬の日』命名説を踏襲し、堀表水も「冬の朝日」の脇句に着目し、「其中冬の朝日と云ふわき甚だ秀で、人々冬の日冬の日と云ひしより、自ら名となりしといへり」（『貞享正風句解伝書』明和七年成）と説いている。

私も『冬の日』という標題が「冬の朝日」という芭蕉句に拠るものと考えたと思うが、「冬の日」という歌語を連句集である『冬の日』に付した命名意図については、中村俊定氏が「こうした淡々とした名称を一集の名に冠したこと

には、芭蕉にとつてもつとふかい俳諧精神につながるものがある」と私は考えた^{〔註一〕}と述べるにとどまっているのである。本稿は、こうした『冬の日』研究の現状に鑑み、『冬の日』という標題の命名意図に関して、『冬の日』の成立の背景、編者の人物像なども交えつつ、私見を展開したい。

《二》

延宝末期、言語遊戯俳諧の可能性を極限まで高めた宗因流（談林俳諧）は深刻なマンネリズムに陥っていた。それは、今栄蔵氏の指摘の通り、「言語機知の滑稽技巧が歴史的にもうこれ以上発展不可能な、ぎりぎりの限界点にきていたこと」^{〔註二〕}を意味していた。つまり、俳諧そのものが行き詰まりを迎えていたのである。

一方、天和期の漢詩文調俳諧も、マンネリズム化した伝統的表現素材にかわる新奇な素材を漢詩文の詩句にもとめて新しさを打ち出そうとする点で、基本的には貞門俳諧・宗因流俳諧と異なることがないのである。

このように、『冬の日』成立前夜とも言うべき延宝末期から天和期の俳壇が、俳諧の将来への確たる展望と方針を持ち得ないまま、いたずらに新しさを競うことに狂奔する混迷状態にあったことをまず確認しておきたい。

貞享元年（一六八四）、一月七日、延宝期以来芭蕉と交流を持っていた信徳の一門の連句集『誹諧五百韻三歌仙』（如雲編）が成り、七月十五日、上京し

た其角と、信徳・春澄・千春ら七名の京衆とで唱和した歌仙五卷、世吉一巻を収めた『蟲集』(其角編)が出る、という具合に、芭蕉シンパにあたる俳人たちの活躍にはめざましいものがあり、俳諧が極端に低迷している時期だけに一層俳壇の注目を集めたはずだ。が、どちらともいまだ旧俳諧の風を破ることはできなかった。こうした中で、貞享元年八月、芭蕉は、門人千里を伴い、前年度に没した母の墓参を兼ねた西上の旅に出発した。いわゆる『野ざらし紀行』の旅である。

《三》

芭蕉は、郷里伊賀上野を経て、九月下旬に美濃大垣に至って、天和期以来の約束を果たすべく廻船問屋木因を訪ね、十月にかけて滞在した。その後、芭蕉は木因同道で多度権現に詣で、桑名に赴いた。木因は芭蕉との同行がよほど嬉しかったのか、四十一歳の旅の俳人芭蕉と三十九歳の自分を「句商人」に見立て、こう興じた。

侘人ふたりあり。やつがれ姿にて狂句を商ふ。しらぬひのつくしに松浦瀉ばちにもあらず、清き渚に玉拾ふいせ嶋ぶしにもあらず、紙子かいどりて道行をうたふ。

歌物狂二人木がらし姿かな

木因

〔桜下文集〕巻一「句商人」

右の「侘人」は、西行の『山家集』にも「わび人の涙に似たる桜かな風身にしめばまづいぼれつつ」「わび人のすむ山里のとがならむ曇らじものを秋の夜の月」と見える歌語である。この語は、芭蕉が木因宛に書いたともされる、天和二年(一六八二)冬執筆の真蹟「笠はり」懐紙の一節「草庵のつれづれ手づから雨の

しぶ笠をはりて、西行法師の侘笠にならふ(傍点引用者)と響き合う。また、天和三年(一六八三)刊の『虚栗』(其角編)の「歌にうき世」歌仙の一品の付句「つくししらぬひ松浦片撥」を踏まえて、「しらぬひのつくしに松浦瀉ばちにもあらず」とするところは、木因の蕉門系俳書に対する興味のほどを示唆しよう。さらに、木因が、世間無用の「狂句」に生きる「侘人ふたり」の道行ぶりを、仮名草子『竹斎』の主人公である「竹斎」とその従者「にらみの介」の面影と重ねて戯画化し「歌物狂二人」と称し、「句商人」という新しい風狂者像を造型するあたり、芭蕉の風狂の心をよく感得していると言える。さすがに木因は芭蕉のよき理解者であった。

芭蕉は、桑名から海路尾張の熱田に至り、「十月より十一月迄の間(越人著『俳諧冬日集権花翁解』)名古屋の地で「尾張五歌仙」を巻くことになった。

「尾張五歌仙」の名古屋連衆は、「江湖」グループの主宰者であった山本荷兮と、彼に率いられた野水・重五・杜国・羽笠・正平らであったが、荷兮以外は、今のところ正平が荻野安静編『如意宝珠』(延宝二年刊)に「尾州小池氏正平」として一句入集していることが判明しているのみである。左の荷兮編『春の日』(貞享三年刊)の入集者のメンバーを見ても事情は同じである(入集者リストは入集句数順に示した)。●の者は貞享五年の俳諧宗匠各派の歳旦三つ物を三つ物所井筒屋庄兵衛が集成した『貞享五年歳旦集』の荷兮一派の三つ物・引付に名が見える者、傍点の者は『冬の日』連衆)。

●荷兮 ●越人 且蘂 ●野水 ●重五 雨桐 李風 昌圭

羽笠 冬文 杜国 芭蕉 舟泉 聰雪(釣雪)と同人)

亀洞 利重 犀夕 呑霞 九白 商露 柳雨 塵交

昌碧 如行 蟲髭

結局、芭蕉が「尾張五歌仙」で同座した名古屋連衆は、「季吟に因むこと深きこの地方」(石田元季氏『俳文学考説』)で主導的位置にあった季吟門蘭秀軒

横船傘下の俳人ではなく、談林の異風に心酔したこともある荷兮の下に集った無名俳人であつたわけで、『冬の日』の輝かしい評価に惑わされて、彼らの俳壇的地位を過大に見るべきではない。雲英末雄氏が「深川隠棲以後の芭蕉は、自らの俳諧に主体的にうちこんで、どの俳壇や集団の中にも属していなかった。俳壇の外側において、ひたすら小グループを指導して新しみを求めていったのである」と説かれる通り^{〔註三〕}、芭蕉は、季吟色の強い名古屋の既成の「俳壇」に左右されず、荷兮の小グループに新風模索の相手を求めたのではないか。『冬の日』の世界は、このような俳系がらみでも儀礼がらみでもない邂逅によって始まるのである。

《四》

芭蕉は、木因の「歌物狂二人木がらし姿かな」(『桜下文集』巻一「句商人」)に滲む旅の風狂の詩情に唱和し、自己紹介と名古屋連衆への挨拶の意を込めて、こう呼びかけた。

笠は長途の雨にほころび、紙子はとまりとまりのあらしにもめたり。

侘つくしたるわび人、我さへあはれにおぼえける。むかし狂歌の才

士、此国にたどりし事を、不図おもひ出て申侍る。

狂句こがらしの身は竹斎に似たる哉

芭蕉

芭蕉は、破れ笠に破れ紙子の「侘つくしたるわび人」の貧寒の旅姿を、「破れ紙子に布裏付、(中略)紙頭巾を打かぶり、あと先丸き瓢箪をさすがの下緒にくくり付、破れ果たる扇をさし」尾羽うちからして名古屋に流浪してきた、滑稽な仮名草子の主人公「竹斎」の侘び姿に重ねることで、欣然と「わび人」とな

つて世間無用の「狂句」(俳諧)に遊ぶ飄逸な風狂人のイメージを造りあげている。この竹斎の登場は、勿論、名古屋衆への謙退の意を示すためでもあるが、夙に石川八郎氏が、延宝八年(一六八〇)刊の『桃青門弟独吟二十歌仙』所収の螺舎(其角)独吟歌仙の発句「月花ヲ医ヲ閑素幽栖の野巫の子あり」と挙句「竹斎門下うらら坊某」の首尾照応に着目して、其角が竹斎を「侘びの風雅を志向する俳諧の先達」の一人と見ていたと説かれていること^{〔註四〕}に注目すれば、芭蕉が竹斎を「侘びの風雅」の先輩として親しんで登場させたのではないかと思える。となれば、「竹斎に似たる」は一層含意性豊かに感じられよう。

すなわち、『冬の日』巻頭句は、「わび人」となつて世間無用の「狂句」一筋に生きる自己の境涯を「こがらし」の自然の景に重ね、「皆様おなじみの竹斎の」とき私ですが、世俗を抜け出して「いっしょに風狂の世界に遊んでみませんか」と呼びかけているのだ。

この「竹斎に似たる」風狂者の侘姿に山茶花をあしらつて、野水は脇句をこ

う付けた。

狂句こがらしの身は竹斎に似たる哉

芭蕉

たそやとぼしるかさの山茶花

野水

折からの木枯らしに山茶花が吹き散る中をいらつちやつた笠の主は、どなたですか、と尋ねる体で、「たそや」に「亭主の挨拶、崇敬して云」(越人著『俳諧冬日集種花翁解』)意がこもる。竹斎の滑稽が微塵も見えず、前句の「竹斎に似たる」風狂の旅人の象徴的用具である「かさ」を出してくるあたり、野水は発句の真意をよく汲み取つていと言え。この発句・脇に触発されて、『冬の日』の世界は、風雅に徹する「わび人」で彩られていく。

①しばし宗祇の名を付けし水

杜国

笠ぬぎて無理にもぬるる北時雨 荷兮（「狂句こがらしの」歌仙）

② 日東の李白が坊に月を見て

重五

巾に木槿をはさむ琵琶打

荷兮（同右）

③ 野菊までたづぬる蝶の羽おれて

芭蕉

うづらふけれとくるまひきけり

荷兮（「はつ雪の」歌仙）

④ うづらふけれとくるまひきけり

荷兮

麻呂が月袖に鞆鼓をならすらん

重五（同右）

⑤ 桃花をたをる貞徳の富

正平

雨こゆる浅香の田螺ほりうへて

杜国（同右）

⑥ 藤の実つたふ筆ほつちり

重五

袂より硯をひらき山かげに

芭蕉（同右）

⑦ 馬糞搔あふぎに風の打かすみ

荷兮

茶の湯者おしむ野べの蒲公英

正平（「つつみかねて」歌仙）

⑧ 晦日^{ミンカ}をさむく刀売る年

重五

雪の狂吳の国の笠めづらしき

荷兮（同右）

⑨ 水干を秀句の聖わかやかに

野水

山茶花匂ふ笠のこがらし

うりつ（「霜月や」歌仙）

右の作例は、荷兮ら名古屋連衆が、風雅に徹底的に興じる姿に俳諧性を見出そうとする芭蕉に和していたこと^{〔註五〕}を示している。特に、①の宗祇ゆかりの泉と聞いて無理にも濡れてみる男の姿は、其角編『虚栗』所収の「手づから雨のわび笠をはりて」という詞書のある芭蕉句「世にふるもさらに宗祇のやどり哉」を意識して、「竹斎に似たる」と称する「狂句こがらしの身」なる人物を思わせる風狂のポーズを描いたものであろうし、⑧の佳境の雪に興じて友人を訪ねる風狂人は『詩人玉屑』や『禅林句集』などに見える「笠重吳天雪、鞋香楚

地花」（笠は重し吳天の雪、鞋は香し楚地の花）の世界から発想されていようが、やはり念頭に『虚栗』所収の芭蕉句「夜着は重し吳天に雪を見るあらん」を先蹤作として意識していないはずはなく、①・⑧の両句がともに、桃青（芭蕉）編『俳諧次韻』（延宝九年刊）に新しい俳諧の方向を感じていた荷兮の作であることに徴すれば、荷兮の芭蕉への新風への関心の深さが窺えるのではないか。また、『冬の日』の結びの巻「霜月や」歌仙の挙句である⑨は、諸注指摘するように、「狂句こがらし」歌仙の脇句「たそやとばるかさの山茶花」との照応を意識し、前句の「秀句の聖」に芭蕉を仮託して「芭蕉への挨拶」（『俳諧冬日集 権花翁解』）とし、芭蕉尊慕の情を披瀝したものである。こうした一座挙げでの「笠」の句への参加が、旅する風狂人（芭蕉のシンボルとしての「笠」）を定着させたことは、「尾張五歌仙」興行の意義の一つに数えられよう。

『冬の日』の連衆はまさに一座同心、芭蕉の「狂句こがらしの身は竹斎に似たる哉」に込められた「風狂」の世界に喜んで応じ、芭蕉の風狂の「座」に参加しているのである。

《五》

貞享元年の文字通り「冬の日」に集った芭蕉と荷兮らの交流の所産である『冬の日』は、芭蕉の『野ざらし紀行』の旅の置土産の形で、半紙本一冊全十七丁の「編者荷兮の私家版、配り本」^{〔註六〕}として、貞享二年ごろ刊行された。後世、蕉風確立の書される『冬の日』も、当初は一尾張地方の荷兮グループの発意欲を充たすだけの田舎俳書に過ぎなかつたのであり、全俳壇が早速「蕉風確立の書」として『冬の日』を歓迎した、などと思うのは過大評価というものであろう。事実、『冬の日』には、伝統的付物のみならず、宗因流の（あしらひ）（ぬけ）（とび）の句まで見出せるのであり^{〔註七〕}、この書を麗々しく「蕉風確立の書」

と称することは、確かに躊躇されよう。

しかし、思いのほか旧風の残滓が存在しながらも、『冬の日』全体を通しては、捻りを加えて勿体ぶる物言いでも末節的な新しさを銜うような知巧、宗因流の無心所着などが影を潜めているのである。

宗因流の滑稽を解体しても俳諧ができるという新鮮な驚き。それは『冬の日』を手にした人が抱いた実感だったはずだ。例えば、江戸蕉門の雄其角は、元禄五年二月に刊行した『雑談集』の中に「皆俳諧の眼を付かへしは、『冬の日』といふ五歌仙にて」と書いている。これは、『冬の日』の同時代人評としてきわめて貴重である。この其角のことばから、自分が関わった『虚栗』や『蠹集』を乗り越えた『冬の日』の「新しき」がいかに衝撃的であったかを知ることができる。まして、『冬の日』刊行の任を担った荷兮の場合は、尚更であつたらう。

この『冬の日』が印象づけた新しい俳諧のあり方は、当時の「談林がその基本装置たる無心所着にゆきづまつた時、これを革新する道は無心所着自体を解体してゆく方向以外になかった」^{〔註八〕}俳壇全体の動向の先頭を切つて示されたために、急速に浸透していくのである。こうした俳壇の流れに乗り、新風俳人芭蕉のネームバリューに縋つて俳壇中央に進出しようとしたのが、『冬の日』の編者荷兮であつた。

実は、見落とされがちな事実なのが、荷兮が、季吟色の濃厚な延宝期の尾張俳壇にあつて、時流に乗つて活躍する江戸談林派の雄田代松意らに積極的に荷担し、松意編『談林功用群鑑』(延宝七年刊か)と同編『談林軒端の独活』(延宝八年十月自序)の両書に前号「尾州」江湖軒加慶」として次の五句が入集していたことは、彼の俳壇活動の特徴を推測する上で注目されてよい。

- ① 衣装持たえてさくらや無下の山 尾州江湖軒加慶
- ② 入鮫やしばらく蠅の命の親 尾州江湖軒加慶
- ③ 鮓おけや今幾日ありて蓼つみてん 江湖軒加慶

④ 須弥盆や南山の秋栗節句

江湖軒加慶

〔談林功用群鑑〕四句入集

⑤ 牧狩や三日かけて影灯籠

江湖軒加慶

右の作例中、特に⑤は古浄瑠璃「ふじのまきがり」の詞章「三日かけていぜんより、みねへわけのぼり、ぜんちやうをまつくだりに、いわをおこし、こぼくをたき、おめきさけんでかりくだす」をもじつた句であり、当時の荷兮の談林の吟調を追おうとする意欲が看取できる。こうした態度は、森川昭氏が紹介された尾張鳴海の知足の天和二年の日記紙背文書で、延宝六年(推定)十一月三日付鳴海勘兵衛(知足)宛「江湖加慶」書簡に如実に現れている^{〔註九〕}。その書簡の中で、荷兮は、「先ハ爰元手柄之義ハ、江戸談林中状書參候。又ハ京惣本寺高政、大坂西鶴よりも大矢数たもり候」と、江戸談林の松意、京の高政、大坂の西鶴ら宗因流俳諧の著名俳人との交流を誇示し、「爰元俳諧江湖之連衆中々江戸ハしらず大坂京ニあまりまけ申仁ハ無御座候」と自派「江湖之連衆」を全国レベルの前衛グループのように自讃した上で、

えんまのおに色そろふ也けり

娑婆にゐて泖地にしたる法のミチ

さりとてハ物になれたる秋の風

禿あがりの夕霧のそら

男伊達して達磨のまなこ

立役者芝居にむかへて九年也

使いそがれ申候間のこし申候

桜鯛汝元来生木のことし

岑入やあぶなうんけん唄づたへ

炭のしやうや朝霜けむるたばこ哉

のような付句三組・発句三句を掲げるが、その俳風はすべて宗因流そのままであり、当時の荷分の俳諧のあり方が如実に示されている。また、荷分は、同書簡で「爰元追付江湖之花と申三百韻江戸にて板行致候。其外糸竹草など申集撰候。我等独吟も追付出申候」と、『江湖之花』『糸竹草』『我等独吟』三書^註の出版予定を報じるが、荷分の軒号「江湖軒」の「江湖」を標題に冠したり、独吟集に「我等」を掲げたりするなど、荷分門弟の存在を広く「江湖」(「世の中」「天下」の意)に問う強い自派意識が漲っている。

まさに本書簡から浮かび上がってくるのは、俳壇中央の時流を鋭くキャッチすることによって、新風よりの独自の地位を築き、「江湖」グループを統率する若き荷兮像であった。

ところで、標題に自派を広く俳壇に知らしめたいという願望を言いこめた『江湖之花』なる俳書の江戸での刊行を企図した経歴のある荷兮にしてみれば、貞享元年時、その俳諧行動が最も注目されていた芭蕉との度重なる同座は、俳壇中央への足がかりを築く千載一遇の好機と思えたはずであり、その連句集の刊行は、その具体的な第一歩と認識されたに相違ない。

上述のごとく俳壇の野心に燃える荷兮が、「尾張五歌仙」の制作時期をそのまま打ち付けに標題にしたとは信じられないのである。荷兮としては、延宝末・天和期、貞享初年に刊行された、標題からしていかにも佞屈な印象を与える俳書群(例えば、『虚栗』『蠹集』など)との差別化を図る、新鮮感のある標題を案出しようとしたのではなかったか。

《六》

ところで、『冬の日』という標題の命名意図を推測する際に注目しておきたのは、荷兮が編集した芭蕉七部集の第三である『阿羅野』(元禄三年刊)であ

る。

本書は、上・下の発句編と員外の連句編より成り、上・下二冊を八巻に分けて発句七三五句を収め、員外には歌仙九巻・半歌仙一卷を収める大撰集であるが、巻一に花・郭公・月・雪の四題、巻二から巻五まで各一卷に一季(春・冬)、巻六に雑、巻七に名所・旅・述懐・恋・無常、巻八には釈教・神祇・祝の句を配する発句編の部立は、編集作業を行っていた元禄二年(一六八九)が西行五百忌の年に当たることを記念して、『山家集』(六家集)巻末の西行百首歌に倣ったもの^註と思われ、その従来の俳書には例がないほど複雑で手の込んだ構成には、編者荷兮の歌俳の趣向への熟知ぶりと好みが見えよう。

『阿羅野』の芭蕉序には、

尾陽蓬左、樞木堂主人荷兮子、集を編て名をあらふといふ。何故に此名有事をしらず。予はるかにおもひやるに、ひととせ、此郷に旅寝せしおりおりの云捨、あつめて冬の日といふ。其日かげ相続て、春の日また世にかかやかす。げにや衣更着、やよひの空のけしき、柳桜の錦を争ひ、てふ鳥ののがさまざまなる風情につきて、いささか実をそこなふものもあればにや。いといふのかすかなる心のはしの、有かなきかたどりて、姫ゆりのなにもつかず、雲雀の天空にはなれて、無景のきはまりなき、道芝のみちしるべせむと、此野の原の野守とはなれるべし。

元禄二年弥生

芭蕉桃青

とあり、芭蕉は「荷兮が」集を編て名をあらふといふ。何故に此名有事をしらず」として、『阿羅野』という標題が、傍線部の行文の典拠たる「雲雀たつあら野におふる姫ゆりの何につくともなき心かな」「山家集」という西行歌を踏まえ、「さまざまなる風情」の間に混迷する「無景のきはまりなき」、「あら野」

(荒野)のとき俳壇において、本書は俳諧の正しい方向を「みちしるべ」する「野守」(番人)たろうとする意志が表明されたものだと遠く思い遣ったというのであるが、勿論、西行五百回忌に因んで『山家集』(六家集本)の「西行百首和歌」に基づいた部立を俳書において案出し得る荷兮が、芭蕉の掲出した西行歌を知らないとは考えられず、荷兮自身、「雲雀たつ」の西行歌を踏まえて『阿羅野』なる標題をつけたに相違ないのである。

右の芭蕉序に「何故に此名有事をしらず」とあるのは文飾なのであり、芭蕉は、荷兮の『阿羅野』命名の由来を十分理解した上で、それを代弁するとともに、編者である荷兮その人をも俳壇の「野守」として称揚する明確な意図をもつて本序文を執筆したのではなかったか。

このように、荷兮の『阿羅野』編纂における歌俳の趣向への造詣の深さに注目するならば、『冬の日』も何らかの和歌的由来を備えていると考えるほうが自然なのではないか。例えば、

程もなくくると思ひし冬の日^{心もとなき}をりもありけり

〔詞花集〕・三三〇番

冬の日^{は詠むるまにもくれ竹のよるぞ}わびしきながき思ひは

〔中納言兼輔集〕七八番

冬の日^{をみじかき物といひながら}あくるまだにも時雨なるかな

〔和泉式部集〕三三二番

冬の日^{のみじかきあしはうらが}れて浪のとま屋に風ぞよわらぬ

〔拾遺愚草〕一一四三番

冬の日^{を春よりながくなすものは}ひつつくらす^{ころなりけり}

〔入道右大臣集〕六九番

といった作例が示すような、「程もなくくるる」「みじかき」「冬の日への」「心もとなき」「ひつつくらす」思ひ—歌語「冬の日」の本意本情—が『冬の日』という標題

に託されているのではないかと思えるのである。

すなわち、『冬の日』編者荷兮は、種々の負的なものを「あはれなり」とプラスに転換する「侘びの風雅」^{注十三}を教導する「わび人」芭蕉との「短き」と思えるほど濃密であった「尾張五歌仙」興行の日々、そして師として慕う芭蕉への痛切な惜別の念などを象徴するものとして、「冬の日」という歌語を俳諧「尾張五歌仙」の標題として付したのではなかったか。

『冬の日』なる標題を目にした人々は、歌語「冬の日」の本意本情を想起し、新風俳人の「秀句の聖」たる芭蕉と荷兮グループとの充実した文雅の日々、ともに別れを惜しみ合う師弟の姿を思い浮かべるであろう。新風俳人芭蕉の師承系列に繋がるイメージの演出、それこそが、後年「身のねがひありてみやこにのぼり、太夫にならん」(轍土著「花見車」卷三)と評された、旺盛な俳壇的野心を持ち主である荷兮の『冬の日』という標題の真の命名意図であったのだ。その意図は見事に成功し、荷兮は蕉門の気鋭として脚光を浴び、『春の日』『阿羅野』と続けざまに蕉門俳書を編纂し、蕉門の「太夫」の道を歩んでいくのである。

〔注〕

注一 中村俊定氏解説『冬の日尾張五歌仙全』(武蔵野書院 昭和三十四年刊)解説中の第三章「名称について」に指摘がある。

注二 今栄蔵氏「俳諧革新の気運」(『日本文学史近世』(学燈社 昭和五十二年刊))に指摘がある。

注三 雲英末雄氏「芭蕉はいかなる俳壇地図のなかに生きたのか」(『国文学』平成三年十一月号)に指摘がある。

注四 石川八朗氏「其角の独立」(白石悌三・乾裕幸編『芭蕉物語』(有斐閣

昭和五十二年刊)に指摘がある。

注五 大谷篤蔵氏「芭蕉連句における『人間』」(『国語国文』昭和三十四年五月号)に指摘がある。

注六 白石佛三・上野洋三両氏校注『芭蕉七部集』(岩波書店 平成二年刊)所収の加藤定彦氏「七部集の書誌」に指摘がある。

注七 乾裕幸氏『『冬の日』は蕉風確立の書なのか』(『国文学』平成三年十一月号)に指摘がある。

注八 小西甚一氏編『芭蕉の本』『風雅の誠』(角川書店 昭和四十五年刊)所収の今栄蔵氏「芭蕉俳論の周辺」に指摘がある。

注九 本書簡は、森川昭氏「冬の日以前の山本荷兮」(『江戸文学』第三号(平成二年六月)に新出書簡として紹介された。

注十 三書ともすべてその存在が知られていない。

注十一 高橋庄次氏『『あら野』をめぐる問題』(『文学』第四十一卷十一号(昭和四十八年十一月)に指摘がある。

注十二 乾裕幸氏は、『『冬の日』まで』(芭蕉講座第一巻『生涯と門弟』(有精堂 昭和五十七年刊)の中で、「(負)の詩的空間」という項目を掲げ、

そもそも『冬の日』という書名からして(負)の世界のものであった。だがそれらは、(負)の世界に属するというまさにそのことによつて、両義化された(佗び)の回路を通り抜けることが出来るのであり、瞬時に(正)の世界へと転換を遂げるのである。芭蕉と荷兮らが出会い、ともに見出したこの『冬の日』の世界は、たとえば「負の詩的空間」とでも名づけたらいいだろうか。と説かれた。